

科学教育は歴史観・政治観を保守化させるか？

——「政治と科学に関する意識調査 (PIAS)」より——

京都大学 山本耕平

1 目的

いわゆる「右傾化」の一部として、修正主義的な歴史観の流布や、主流の憲法解釈を無視する動きが注目されている。本報告は、そうした保守的な歴史観および政治観にたいして、教育がもたらす効果を検証する。一般に、教育期間が長いほどこうした問題についてリベラルな態度を持つ傾向があるとされるが、その効果には専攻分野による違いがあるかもしれない。Ma-Kellams et al. (2014) は、科学教育によって経験的探求を重視するエートスを身につけることが、よりリベラルな態度につながるという。しかし、「経験的探求」の意味によっては、自然科学的な探求方法が適用できない政治や歴史といった領域にたいしてはかえって相対主義的な態度をとることにつながり、それが歴史学や憲法学の成果を軽視する態度を生み出すかもしれない。

2 方法

そこで、2016年に実施された「政治と科学に関する意識調査 (PIAS 調査)」のデータを用い (同調査の概要については、同じ部会の第一報告 (太郎丸) を参照のこと)、歴史学や憲法学の成果にたいする態度を被説明変数とする重回帰分析をおこなった。具体的には、憲法解釈の客観性や歴史学者への信頼といった事柄に関する 8 項目の質問への回答に因子分析をおこない、抽出された 3 つの因子のうち「歴史記述不信」と「学問軽視」について求めた因子得点を被説明変数とした。説明変数は、本報告で注目する大学での専攻のほか、保革尺度、権威主義的態度、歴史や政治にかんする知識、インターネット利用頻度、性別、年齢、教育年数を含めた。専攻分野は、文系分野は科学教育なし (教育や人文) とあり (社会科学) に分類し、理系分野は医学系とそれ以外 (自然科学や工学) に分類した。さらに、因子分析によって抽出されたもう 1 つの因子 (相対主義的態度) によって専攻の効果が媒介されるかどうかを検討した。

3 結果

相対主義的態度を投入しない重回帰分析の結果、いずれの被説明変数にたいしても保革尺度が有意な正の効果を持っており、自身が保守的であると認識している回答者ほど、歴史記述に不信で歴史学や憲法学を軽視していることが分かったが、それとは独立に、歴史記述不信には医学系、学問軽視には非医学系の理系が、それぞれ有意な正の効果と及ぼしていた。教育年数は負の効果を持つが、上記の専攻の効果が教育年数による負の効果打ち消すことが示唆された。そして、説明変数として相対主義的態度を投入すると、上記の専攻の係数は小さくなり、有意でなくなった。このことから、専攻分野と歴史観・政治観との関係は、歴史や政治といった問題にたいする相対主義的態度によって媒介されていると考えられる。

4 結論

以上から、教育年数という量だけでなく、科学教育を受けるかどうかという質の違いによって歴史や政治にたいする態度が変わりうることに、科学教育が思わぬ副作用をもたらしている可能性が示される。ただし、医学系と非医学系の理系との間でなぜ効果に違いがあるかについては、慎重な検討が必要である。

文献

Ma-Kellams, Christine, Aida Rocci Ruiz, Jacqueline Lee and Andrea Madu, 2014, "Not All Education Is Equally Liberal: The Effects of Science Education on Political Attitudes," *Journal of Social and Political Psychology*, 2(1): 143-63.